

<特集コラム4>

「場」が持っている意味から見えてきたこと

岸本智志

(鳥取県立智頭農林高等学校)

年末年始にはテレビを見ることが多い。私にとっての秀作は、昨年放送されたNHKの「ドキュメント72時間」(以下「72時間」)の人気ベスト10を、5時間にわたって放送したものだ。この番組は、ある場所に3日間にわたって定点カメラを置き、その場をたまたま訪れた人が、インタビューに答えているものである。ドキュメンタリー番組は多々あるが、いずれもスペシャルなものである。社会的課題を追及したり、プロフェッショナルな人であったり、またその場で出会った人であっても、長々と私生活までも追いかけていく。この番組は、ある場所に現れる人々と、その人のその場での想いを伝えるだけで、その日常を伝えることに終始する。普通の人語りには、多くの人が見入ってしまうのはなぜか考えてみた。その答えはおそらくこの番組で最も重要な、この「場」にある。そこは、例えば古ぼけた大学の寮や、最果ての岬、樹木葬の墓地、出会い系喫茶であったり、また、サバゲーができる場所だったりする。その多くは、社会の中では普段注目されない場所である。それだけでなく故高口明久先生が述べられていたような周辺化された場所¹であることが多い。誰でもアプローチできる場所なのに、そこは多くの人にとってはあまり訪れることのない非日常の場所。そこに日常を置く人の語りを通して、人生への向き合い方への多様さと、その場を訪れるという行動に心地よさを覚える。それは、この場所を訪れる人たちにとって居心地の良い場所となっているからであろう。場所と人々との行動とは不可分なものとなっている。一方で、人々の語りを通して、日本が抱える社会問題の一面を伺い知ることになる。

この番組を見ていると、ある場所を想起させる。それは15年前、私が勤務していた通信制高校²である。その場所は神奈川県横浜市。横浜駅から歩いて10分という交通至便の場所にある。全日制課程と並置されており、全日制は100年以上の歴史を持つ伝統校。一方通信制は、戦後、アメリカの制度を取り入れて、主に「勤労青少年に学習の機会を付与する」ために設置された。生徒が登校するのは基本2週間に一度だけ。日曜日か火曜日どちらかに行われるスクーリングの時である。これを単位数に応じて規定数出席するとともに、日常的には自宅でレポートを完成させ送付し、テストに合格すれば、単位要件を満たすことにより卒業できるシステムである。前籍校で取っていた単位も認定されるため、1年生から入学する生徒に加え、他校からの転入学や編入学の生徒も半数を占める。そのような学校の日を「72時間」風に切り取ってみた。

秋の日ざしがあふれる日曜日。大きな荷物を抱えた人々が次々に校門をくぐってくる。10代から20代の若い世代が中心であるが、中高年の女性や小さな子どもを連れた人もいる。その中に、学校の制服を着てラケットを提げて登校してくる女子生徒がいた。あま

りにも大きな荷物を抱えているので、まず鞆の中身から聞いてみる。「バッグには授業の教科書やノート、体育があるので体操服。それに、部活用の服や専用シューズも入っているからこんなになったのです。通信に来たのは、定時制は夜が怖いから。今着ているのは友達のおねえさんの制服。これを着ると学校に行っているって感じがする。通信では友達も少してきたし。2週間に1回の部活だけ、バドミントンをやっています。明るい元気な声が返ってくる。スクーリングが始まる。通信制用の教室で普通教室よりも広い。60程度の席がほぼ埋まっている。授業の後に担当の教員に話を聞くと生徒の座る席はほぼ決まっている。最前列には熱心に話を聞いてくれる中高年の女性。中ほどから後方にかけては高校生世代や20歳前後の世代が座っている。」50代の女性に話を聞く。「スクーリングが楽しみできています。いろいろあって高校に通えなかったけど、今こうやって授業を受けて本当に楽しいです。同世代の人たちも何人かいて、すぐ友達になれました。」別の70代後半の女性は「横浜大空襲を子どものころに見ました。空が真っ赤にそまっていた。戦争の話は現実です。」40代の女性は「朝鮮高校を卒業したのだけれど、日本の高卒の資格ではないので、ここに通っています。」チャイムがなると、次の教室への大移動が始まる。ひととき元気な高校生年齢の女子生徒に声をかける。「アメリカンスクールとのダブルスクールです。看護師になるために高卒の資格が必要なのでここにきました。今この学校で生徒会長をやっています。」スクーリングが終わり、最後はHRの時間。平日は全日制の生徒が使っている教室を使う。後ろには全日制用の生徒ロッカーがある。担任の教師は「今日は20数名の出席。4月の開講時は大変でした。60人近い生徒がいるから。机を20近く入れなければなりません。1列に10の机を並べるのです。席を後ろに引くこともできません。でも、その数もだんだん減ってきて、秋のこの頃になると、机は余ってきます。最終的に単位を修得できるのは、クラスの3分の1程度ですね。」放課後自習室でレポートを書いている生徒に聞く。「普段のレポートは、教科書を見れば大体できます。まずレポートの中の文章が教科書のどこにあるかを探します。そこがわかれば、カッコの中に入る言葉を見つけるのはそんなに難しくない。成績が悪くて全日制は無理っていわれてきたので。教科書の内容はあまりわかりません。」小さな子どもを連れていた若いお母さん。「子どもができて、高校を途中でやめてしまいました。ここは、子どもを1日500円で預かってもらえるので助かります。この子の為にも高卒の資格だけは絶対にとろうと思っています。」

全国の高校生の9割は全日制に在学している中で、7%の生徒が通う定時制、通信制、その中でも特に通信制生徒の学習の状況は見えにくい。しかし、1割に満たないとはいえ、現在20万名を超える生徒が通信制で学んでいる。そこにも確かに高校生の日常がある。この場で、どのようなバックグラウンドを持った生徒が、どのような理由で、どのような学びをしているかが見えてくる。最初の女子生徒は全日制に憧れ、毎日登校したかったことがうかがわれる。彼女は2週間に1回の学校とはいえ、生徒会や部活動、HRなどの「学校的」な文化に積極的に参加していた。しかし、自分のロッカーはなく、多くの荷物を抱えながら、ぎゅうぎゅう詰めの教室でスタートする学習環境は、全日制との違いを突き付けられる。勉強が苦手である生徒は、より細やかなケアが必要なのに、ここでは自学が求められている。自分でレポートが完

成できない場合は、高い学費を払ってサポート校に通うことになる。教師の立場からすれば、レポートという名前のほぼ穴埋めプリントは、とても学習とは言えないものである。しかし、同じ場所を見つけて写すというコピーマッチ方略で対応するしかない生徒の現状を見ると、これで仕方ないかなという思いが錯綜する。今年の1月の新聞³では、ある私立医科大学が、女性や浪人生、さらに高認（旧大検）資格者に対しては、事実上マイナス点を与えていたと報道されていた。高校は普通に卒業してあたりまえという日本の社会通念が事象として現れ、それが通信制高校でも、高卒資格を求めて一生懸命努力している姿に見て取れる。何気ない語りから様々な社会問題が想起できるのである。そのような中でも、この学校に自分の居場所を見出し、過去の自分を乗り越え、今ここで学べる事へのささやかな幸福感や、夢を語る姿はまさに「72時間」の中で見られた多くの姿と同じであった。

15年も経て当時の事が記述できるのは、私が物覚えがよいからではない。当時の出来事を客観的にとらえようという視点を持ち、それを文字記録として残しておいたからである。この時私は、昼間は通信制高校で働き、夜間は近くにある大学の大学院で学んでいた。通信制の前任校は最底辺に位置付けられた全日制普通科高校、いわゆる荒れた学校であった。どうすればこの生徒たちが聞いてくれる授業ができるのか、教育学にその答えをみつけるために理論の場に身を置いてみた。その時に大きな影響を受けたのが、心理学者のJ.J.Gibsonが提唱していた生態学的アプローチ⁴という視点であった。教育学、特に教育方法学では、どのように教えれば効率的に生徒が学習していくかということに重きが置かれ、どうしても教師がどうするかということになってしまう。ところがギブソンは、社会的環境も含めた広い意味での環境と、その場で行われる人の行為との関係を相対的なものと捉える見方を提唱した。文化人類学におけるエスノグラフィーという研究はすでに知られているが、統制された空間の中での量的研究が主流を占める心理学研究の分野では、その場で起きていることを相対化して記述する質的研究はマイナーなものであった。その分析単位は一人一人異なる歴史的、文化的背景を持った教師、生徒、学級、学校になり、それぞれが影響を及ぼしながらどのような相互行為があるのかを見ることになる。通信制という学習環境の中で、生徒は何を思い、どう行動しているのか。また、多様な生徒の中で、教師は何を考えどのような授業デザインをしようとしているかを、学校という生態系の厚い記述から読み学んだ⁵。当初目論んでいた学校でのノウハウは学べたとは言えないが、学校を切り取る確かな視点を得たことは、教師としての大きな成長だった。学習の場の重要性、教師や生徒の行動やナラティブな語り、形作られた強固な学校文化、それらを含めた学習環境のデザイン等の関係性から日本社会が抱える問題を見ていくことができるようになったからである。

「72時間」1月の放送「秋葉原電子部品に魅せられて」では、秋葉原の電気街のパーツショップで買いものに来ていた女子高生を追っていた。高校三年生という彼女はオタ芸用のLEDライトの部品探しにきたとのことである。人間と物との関係は相互行為である。場違いとみてしまうステレオタイプの見方ではなく、多様な生き方があっていいと素直に思えた。「来年1年間は進学や就職ではなくて自由にさせてって親に頼んだら、いいよって言われた。」と嬉しそうに帰っていった。夢中になれるものがあること。それを提供してくれる場があること。そんな生き方をしようと思える高校生と、それを認めてくれる親がいることにほっとさせられた。

(注)

- 1 高口明久「学校における競争と再生産」教育科学研究会『講座 現代社会と教育 第3巻 学校』大月書店，1993年
- 2 現在この通信制課程は，他の高校の通信制課程と統合され，郊外に通信制の単独校が新設された。自前の校舎を持ち，毎日通えるコースも設定されている。
- 3 朝日新聞 2020年1月17日『医学部入試「差別あった」聖マリアンナ医第三者委』
- 4 J.J.ギブソン，古崎 敬訳『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社，1986年
- 5 岸本智志「学習科学から見た通信制教育」横浜国立大学大学院教育学研究科修士論文（未刊行），2002年

岸本智志（鳥取県立智頭農林高等学校教諭）